





アヤノ35歳は10歳になる娘のカレンと小さなアパートで二人暮らしをしている。

アヤノは夫の不貞が原因で離婚し、以来、男を常に求めるSEX依存症に陥っていた。その日もアヤノは新しい恋人、正一を部屋に連れ込んでいた。

アヤノはカレンが学校に行っている間に正一を部屋に招き入れた。

正一は30代前半で、スーツを着こなした精悍な顔立ちの男性だった。二人はソファに身を寄せるように座り、熱い口づけを交わした。アヤノは正一の首に手を回し、荒々しく服を脱がせた。正一もアヤノの服を剥ぎ取り、露わになった胸を揉みしだいた。

「ああ...正一...」

アヤノは喘ぎ声を漏らしながら、正一の硬くなったものを食べるように口にした。正一はアヤノの頭を押さえ、激しく腰を動かした。アヤノの舌はねっとり正一の体を這い回り、二人は絡み合った。

一方、カレンはその日、学校を早退していた。学校でいやなことがあり、家に帰ったのだ。

カレンがそと部屋のドアを開けると、そこには信じられない光景が広がっていた。母のアヤノが、見知らぬ男とベッドを共にしていたのだ。

「お母さん...?」

カレンは固まってしまった。

アヤノはカレンの存在に気づいていなかった。カレンは目を離せないまま、二人を見つめていた。正一はアヤノの体を激しく責め立て、アヤノは快感に身をよじらせていた。

「ああ...そこ...正一...」

アヤノの甘い声が部屋に響く。正一はアヤノの体を翻し、今度は後ろから激しく突き上げた。アヤノの豊かな胸が揺れ、汗が光る肌が露わになる。

カレンは初めて見る母の淫らな姿に、戸惑いと恥ずかしさを感じていた。

「お母さん...」

カレンは小さく呟いた。その声に、アヤノは我に返った。アヤノは正一を振り切り、カレンに駆け寄った。

「カレン! どうしたの、こんなところに!？」

「ごめんなさい、お母さん...学校でいやなことがあって...」

カレンは涙を浮かべて母に抱きついた。

アヤノはカレンを優しく抱きしめ、なだめた。正一はベッドの上で裸のまま、二人の様子を窺っていた。

「ごめんね、カレン。お母さん、ちょっとこの人と話をするから、部屋で待っててくれる？」

アヤノはカレンを自分の部屋に送り出した。

アヤノは正一を追いつめたが、正一は服を着ながら、不敵な笑みを浮かべた。

「そう簡単にはいかないよ、アヤノ。僕はあの子が気に入った。あの子と遊びたいんだ」

「やめて! カレンには手を出さないで!」

アヤノは必死に訴えたが、正一は冷たく笑った。

「じゃあ、君が僕の言うことを聞いたら、あの子には手を出さないよ」

「...何が望み？」

アヤノは警戒しながらも、カレンの身を案じて問い返した。正一はゆっくりと近づき、アヤノの耳元で囁いた。

